

山旅通信【ひとり画つ展】一一六七号

▼『日本百名山の伝説と神話』（六七）

甲武信ヶ岳のはなし

「拳山と笛吹権三郎伝説」

奥秩父の甲武信ヶ岳は、埼玉（武蔵）、山梨（甲斐）、長野（信濃）の三県にまたがっています。かつては、この三国境を、江戸時代に出版された『新編武蔵風土記稿』や『武蔵通志』では国師岳とあります。また甲州の地誌『甲斐国志』では三繫平（みつなぎだいら）、信州の『信府統記』では大榎峠（おおさわらとうげ）と呼んでいたそうです。三繫平、大榎峠は、いまの地名では見あたり

ませんし場所も不明です。しかしそれらの古書に国師岳とあるからには、六・五キロ南西の国師ヶ岳と混同したものではないかと考えられています。

また埼玉県秩父市大滝（旧秩父郡大滝村）の栃本地区方面では、この山を「拳（コブシ）」と呼んだそうです。これはこの地区の高いところに登ると、三宝山・甲武信



ヶ岳・木賊山の三山がいかにも、大空に「ゲンコツ」が持ち上がっているように見えるからといえます(『山の憶い出』木暮理太郎)。さらに甲斐の山梨県三富側では、三国の境なので「三国」、信濃の長野県川上村では「三方山」と呼んだとの情報もあります。ただこれは甲武信

甲武信ヶ岳



ヶ岳の北方にある
いまでいう三宝山
(さんぼうさん)
のこのよう
です。

しかし、いまの
名は甲武信ヶ岳。

でも甲武信と書いて「こぶし」と読ませるには、やはりちよつと無理があります。知らない人が「こぶしん」と読んでいるのも仕方ないことですよ。こんな読み方にさせたのは理由があったようです。

明治時代、農商務省が作った地図「甲府図幅」に、三つの国名(甲斐国・武蔵国・信濃国)の一字ずつをとって「甲武信」と記載しました。さらにお役人は、武蔵側で「拳(コブシ)」呼んでいることに目をつけました。そして甲武信の字を「こぶし」と読ませました。機転の効いた人がいたものですね。

山の名前についてはさらに、先述の通りかつて甲武信ヶ岳は六・五キロ南西の国師ヶ岳と混同され、コクシと呼ばれていたあったそうです。このことについて、『奥秩父研究』などの著書のある原全教氏も『奥秩父回帰』の中で、コクシが転化してコブシになったのだろうともしており、それぞれ持論を述べています。蛇足ながらクシは「越す」から転じて小丘の意味を持つといえます。なんか難しい話です。

▼【展望】

甲武信ヶ岳山頂からの展望は東以外は抜群です。北東に目をやると谷川岳、榛名山、浅間山が、また北アルプ



スの山々、八ヶ岳、国師ヶ岳から金峰山など奥秩父。さらに中央アルプス、南アルプス、天子山系、御坂山系と富士山などが望めます。高山植物は山頂付近にコケモモ、ヒメシヤジン、ヒメイワカガミ、キバナノコマノ

ツメなど分布。山頂直下に甲武信小屋があります。

▼【三つの源流】

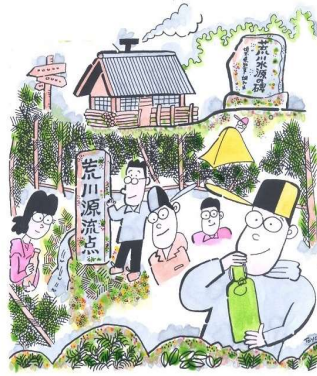
さて、この甲武信ヶ岳を起点に、雁坂峠から雲取山方面の東へ延びる尾根、また西へのミズシから国師ヶ岳方面へ延びる尾根、さらに三宝山、十文字峠方面の北へ延びる尾根があります。この三つの尾根が分水嶺になって、甲武信ヶ岳は南に流れる笛吹川、西に流れる千曲川（信濃川）、北東へ流れる荒川と、三つの川の源流部が集まっています。

▼【荒川源流】

甲武信小屋下の踏み跡を下っていくと、荒川の支流の本谷の源流があり、「荒川源流点」の碑が建っています。荒川は、奥秩父東北面域の水を集めて、秩父、長瀨、寄居、熊谷、大宮、川越と埼玉県を貫流。東京都北区の岩淵水門で本流の荒川と支流の隅田川に分かれ東京湾にそ

そいでいます。東京の奥座敷・奥多摩から秩父山地の北側をまわり込むため、延長一六九キロ、流域面積二九四〇平方キロにおよび、関東第二の河川になっています。

▼【千曲川源流】



一方、長野県内の千曲川が、新潟県に入ると信濃川と名を変え日本海に注ぐ信濃川。総延長は三六七キロで、日本一の長さ誇る川だそう

です。その源流も甲武信ヶ岳の西北長野県側直下、標高二二〇〇m地点にあります。島崎藤村の『千曲川のスケッチ』、小林一茶の『帰郷』の舞台にもなっています。『万葉集』では筑摩川として詠まれて以来、多くの古歌に登

場しています。

甲武信ヶ岳山頂から西側、ミズシと呼ばれるピーク手前の鞍部から長野県側の源流点に降りて行きます。そこには「千曲川信濃川水源標」とか、地元の小学生のつくった立て札のほか、「清流、いつでも美しくあれ」などと書かれた木柱がたくさん建っています。登山者はザックをおろし大休止。おやつを食べる者、突然湧き出す水を口にする者、それぞれに憩い源流点は以外ににぎやかでした。

▼【笛吹川源流】

またここには上記の荒川、千曲川のほか、南ろくに笛吹川の源流が突き上げています。笛吹川は、源流から山梨県山梨市三富（旧東山梨郡三富村）広瀬付近から甲府盆地へ、さらに鯉沢町付近で釜無川と合流し富士川となり、富士山の西側を通って静岡県に入りやがて駿河湾に

注ぎます。

笛吹川の源流域は、大正・昭和期の登山家である田部重治が紹介してから全国的に知名度をあげた所。ここには、小屋の飲料水を汲み上げるポンプ小屋があります。



「道の駅みとみ」で、笛吹川源流まつりも行われています。

三つの源流水のなかでは一番おいしいとか。源流点の付近は風化して、岩くずでおおわれた急斜面になっています。ふもとの広瀬地区では毎年

この笛吹川にはこんな伝説があります。昔、芹沢の里（いまの三富村上釜口地区）に、権三郎という若者がいました。権三郎は鎌倉幕府に反抗して追放された日野資朝一派の藤原道義の嫡男でした。彼は父が甲斐に逃れたと聞き、母を伴って尋ね歩く途中、この里にたどり着いていたのです。しかしせっかく尋ねたこの地も、父はずでにこの世にはないと知らせに、村人と一緒に暮らしていました。権三郎は笛の名手でもありました。彼が吹く笛の音は村人の心をなごませ、里人は彼を「笛吹権三郎」と呼んでいました。

そんなある年、長雨がつづいて彼の家の近くを流れる子西川（ねとりがわ・いまの笛吹川）が、とうとう氾濫。権三郎と母親が住む丸木小屋を押し流してしまったのです。権三郎は流木に必死でつかまることができ、何とか助かりましたが、母親は無惨にも濁流に流されてしまいました。権三郎は行方不明の母親を探し歩く日が続きま

▼【笛吹川の権三郎伝説】

した。悲しみに打ちひしがれ流れる笛の音。

しかし彼の努力は報われることはありませんでした。

とうとう権三郎は川の淵に身を投げてしまいました。そして遺体はずっと下流の小松の河岸で発見されたのでした。変わり果てた彼の手にはしつかりとあの笛が握られていました。里人は涙を流して同情し、その土地の名刹である長慶寺というお寺に葬りました。

それからというものの、夜になると毎日川の流れの中から、美しくもあり悲しい笛の音が聞こえてくるようになりました。これはあの権三郎が吹いているのではないか、村人たちはいつしかこの川を「笛吹川」と呼ぶようになり、いまでも芹沢の里では「笛吹不動尊権三郎」として尊崇しているということです。

★【所在地】

・埼玉県秩父市大滝（旧秩父郡大滝村）と山梨県山梨市三富（旧東山梨郡三富村）、長野県南佐久郡川上村との境。中央本線塩山駅の北二二キロ。JR中央本線塩山駅からバス、西沢溪谷入口下車、歩いて六時間二〇分で甲武信ヶ岳。写真測量による標高点（二四七五m）がある。そのほか付近に何もなし。山頂直下に甲武信小屋がある。地形図上には山名と標高点の標高のみ記載。標高点より南南東方向直線約三〇〇mに甲武信小屋がある。

★【位置】（国土地理院「電子国土ポータル」GISシステム）から検索）

・標高点：北緯三五度五四分三二・九秒、東経一三八度四三分四三・九二秒

★【地図】

・二万五千分の一地形図「金峰山（甲府）」

▼甲武信ヶ岳【データ】

▼【参考文献】

- ・『角川日本地名大辞典・長野』（角川書店）一九九一年（平成三）
- ・『信州山岳百科三』（信濃毎日新聞社編）一九八三年（昭和五八）
- ・『新日本山岳誌』日本山岳会（ナカニシヤ出版）二〇〇五年（平成一七）
- ・『日本山岳ルーツ大辞典』村石利夫（竹書房）一九九七年（平成九）
- ・『日本三百名山』毎日新聞社編（毎日新聞社）一九九七年（平成九）
- ・『日本山名事典』徳久球雄ほか（三省堂）二〇〇四年（平成一六）
- ・『日本の民話八』（常州・甲州）（未来社）一九七四年（昭和四九）
- ・『山の憶い出』木暮理太郎：『日本山岳名著全集二』（あ

かね書房）一九六二年（昭和三七）所収

- ・『日本歴史地名大系・長野県の地名』（平凡社）一九九〇年（平成二）

.....

【とよだ時】

★アマゾン本・作者コーナー

<https://www.amazon.co.jp/stores/author/B004L1SDTE>

★ My books ほか

<https://toki.moo.jp/baiten/baiten.html>

★ グッズ・SUZURI 社

<https://suzuri.jp/toki-suzuri/products>